

庚寅文月十七日

無涯塾師範 廣瀬敏男

相伝に就いて

「相伝」という項を、広辞苑で調べてみると、「あいつたえること。代々うけつぐこと。つたえつぐこと」としてある。

この「相伝」について、千家十職の一つである楽焼の、楽家十四代・楽吉左衛門氏は次のように言っている。

「父である楽家十三代惺入は、若い時からは茶碗のつくり方を決して教えなかった。要するに、見て覚えて感じ取れ。茶碗を手に持った感じ、口に当てた感じ。教えられてやったなら茶碗にその教えた人のクセが入ります。茶碗はこんな風に焼くのだと教えてもらえるのはある程度出来て結果をみてからです」と。

更に、

「楽家には、＜一子相伝＞ということがあると思われていますが、そんなことはありません。相伝というのは教えないことだと思います。その時代時代にあった創作が求められるからで、踏襲は決してよくない」と、結んでいる。

この話を居合道に置き換えてみると、現代の居合は教え過ぎているように思う。

「刀の握り方から抜き付け、切り下し、構えや体捌き、そして着付けから袴のたたみ方まで」である。自分たちが居合を習った頃は余り教えてもらえなかったものだ。

自身、先生の稽古にご一緒させてもらい、どうしたらあんな居合が出来るのか盗み見たものである。だらしのない着付けをして仲間から笑われたり、刃筋の通らぬ抜き付けや、理に合わない真向の振り下しをして満座の中で恥をかき悔しい思いも随分した。常に緊張しびりびりとした中で、恥をかき、悔しい思いこそが大事なことであると思ってきた。

楽吉左衛門氏のいうように、将来を託す者には出来上がるまで教えないことがいいのではないかとも思うことがある。武道とはそんなものであるかも知れない。でも自分はそれとは真反対の指導をしている。それは、自分が学んできたことを軽々と教えてしまう。

だが、私たちが稽古している「夢想神傳流居合」を相伝している先生方もたくさんおいでになるが、昔の伝書とは異なる演武も実に多い。時間軸で見ても変化してきている。

楽氏の言うように「時代にあった創作、踏襲しない作陶」ということが居合でも既に起こっているのだろうか。一考を要する問題である。

無涯塾の諸君。結論は、

「居合は見て覚えて感じ取れ」が相伝の元ということであろう。 了